

日本の建築空間と庭園

—明治から20世紀初頭にかけての欧米におけるその受容と普及—

【趣旨】

ロール・シュワルツ＝アレナレス*

国際日本学シンポジウム第2セッションの企画者として、このテーマを選んだ理由、セッションの方向性と課題を振り返りたい。

I 欧米における日本の建築・庭園の現状とその影響力

1. はじめに

本テーマを選んだ背景としてまず、欧米における日本の建築・庭園をめぐる現状と、この分野の研究状況がある。19世紀末以降、日本の建築家が生み出した建築空間や風景は、西洋人にとって目下、日本文化の最も活発で、最も評価の高い表象の一つとなっており、さらにこの表象は、海外の美術館や展覧会に現れることで、これを受け入れる場所や文化との直接的な対話をもたらし、その受容と影響という問題を直に提起するものとなる。このような国境を越えた行き来の例として「松風荘」が挙げられる。日本からアメリカに贈られた見事な書院造の松風荘とその庭園は、1954年にニューヨーク近代美術館で展示されると大きな成功を収め、日本の芸術、文化に対する真の熱狂をアメリカに引き起こした。奈良国立博物館新館の設計でも知られる吉村順三によって設計された、茶室と庭園を含むこの建築は、その後フィラデルフィア市フェアモントパークに移築され、現在も一般公開され、生け花や茶道、講演会といった

様々な活動に使われている。

21世紀に入った近年、ニューヨーク近代美術館の新たな増改築を担ったのは、やはり日本人建築家、谷口吉生であった。マンハッタンの都市風景にさりげなく開かれた開口部と、「彫刻庭園」の新たな展開は、2004年のリニューアル・オープンの際に高く評価された。ちなみに谷口氏は、1999年に開館した東京国立博物館法隆寺宝物館の設計をした建築家でもある。

今日ヨーロッパでは、多くの日本人建築家が建築プロジェクトを提案、実施し、高い評価を得ている。国外の美術館や展覧会の例に限ると、2010年5月にオープンしたばかりの坂茂氏のメッス・ポンピドゥーセンターが挙げられる。坂氏はまた、2000年のハノーヴァー万博で日本館の設計を担当したが、これは段ボールで製作されたもので、2001年に世界建築賞を受賞した。2006年にヴェネチア・ビエンナーレ建築展で日本館のコミッショナーを務めた藤森照信氏は、西洋では現在、木の上に作られた茶室の設計者として有名である。周囲の自然と風景に調和した、永続的でエコロジーに配慮した建築を求める新しい要求と期待に応えるこれらの作品はまた、空間と伝統的素材を現代的な形式と用途に融合させようとするものでもある。そこで、今日の世界的傾向にこれほど合致するこうした日本の現代建築の成功の理由とその影響を理解するには、本シンポジウムのねらいでもあるように、まず日本の建築・庭園の理論的、実践的基本に立ち戻り、明治以降20世紀前

*お茶の水女子大学大学院准教授

半にかけて、それがどのように西洋に伝わり、近代性へと変化をとげ、そして国境を越えていかに他者から借用し、あるいは他者に影響を与えてきたのかを分析することが重要となってくる。

II 研究対象としての建築空間と風景：研究の現状と文献

現代の日本建築のこうしたインパクトや現代性への認識から、個々の建築作品を歴史的に捉え直したいという思いを抱いた訳だが、他方こうした考察を促す専門研究という背景やその動向も、本セッションのテーマを選択する上での要素となった。筆者自身15年ほど前より絵画における風景の表現、そしてとりわけ平安時代の作品における風景の役割について、比較研究的なアプローチの下に関心を寄せてきたが、その中で日本と同様に欧米においても、建築や風景の伝統とその進化に関する研究が進展しつつあることを認識してきた。1980年代の中頃より、こうしたテーマを扱う論文や書籍、シンポジウム、展覧会といった豊富で多様な研究のおかげで、今日では建築史を自然、特に庭園との関係で分析する有効な概念的ツールを私たちは有している。例えばヨーロッパ、特にフランスでは、哲学者や文学者、美術史家が先頭に立ち風景の歴史を明らかにしようとする書籍や、その状況や意味を地理学、哲学、文学、建築学、生態学、環境、都市計画、あるいは美学といった多様な学問、研究方法からまとめようとする書籍が、今日では数多く存在する（Mort du paysage - philosophie et esthétique du paysage - 『風景の死－風景の哲学と美学－』、François Dagognet 監修、1982 / Court traité du paysage 『風景小論』、Alain Roger、1997 / Les enjeux du paysage 『風景の課題』、Michel Collot 監修、1997 / L'invention du Paysage 『風景の発明』、Anne Coquelin 監修、PUF、2000 / Le paysage et la mémoire 『風景と記憶』、Simon Schama、1995等）。

建築と庭園に関するこうした学際的研究は、1980年代初頭より、世界各地の風景の歴史、定義、存在論についての考察といった形で取り組まれてきたが、その発展と並行して、日本学というさらに限定された分野においてもまた、欧米における先駆的な研究や翻訳へとつながる、このテーマへの新たな関心が生まれてきたことが分かる。1990年代初頭から増大してきた建築空間に対するこうした関心や研究は、近代以前か、あるいは近・現代を扱うかによって二つのカテゴリーにまとめられると筆者は考える。また分析方法としては、特に近代以前の場合には、美学、宗教、社会といった様々な内容を論じる日本の文献の研究を基にした歴史的アプローチを優先する傾向と、東洋と西洋の対話を通じて建築空間と風景の理論を提唱することを目的とした、美学的、哲学的研究とに区別することができる。

* 伝統的建築と庭園：研究分野としての成立と日本学の貢献

本セッションテーマへの取り組みの特徴であるこの方法論的区分は、例えば最も愛され、最も外国人が訪れる京都の庭園のひとつである竜安寺の研究にはっきりと表れる。フランスでは、古代仏像を専門とする美術史家であるINALCO教授のフランソワ・ベルティエ（1937-2001）が、1989年に『竜安寺石庭 石に禅を読む』¹と題する著書を発表した。その中でベルティエは竜安寺石庭の世界を、その豊かな宗教的、美学的背景に着目しながら、優雅に簡潔に、庭園の歴史の中に捉え直した。何度も版を重ねたこの本は、学問の世界だけでなく一般の読者にも大きな反響を呼び、竜安寺を訪れる日本への旅行者は、西洋語で書かれたこの小さな本を手に入れるようになる。この本に感銘を受けた研究者の中に、長年中国と日本の思想を比較研究しているニーチェの専門家、哲学者のグラハム・パークスがいた。彼はこれを英訳し、日本の思想における石の意味についての哲

学的エッセーを載せて2000年に出版した²。

それより以前には、古い時代の研究として、著名な日本学者ベルナル・フランクが源融(822-895)の河原院に関して行った研究³が挙げられる。これは日本語に翻訳されたことで近年再び脚光を浴びている。ベルティエが竜安寺の解釈の中で、禅僧と禅の精神性の表現の場として「枯山水」の意味を解き明かそうとしたのに対し、日本思想の優れた専門家であったベルナル・フランクは、平安時代の宗教的背景と文献の調査に基づく博識に満ちた鋭い分析の中で、この庭園と9世紀の貴族の美学との関係性とその意味を浮き彫りにしている。名所の礼賛と仏教の瞑想から生まれた詩作の場のような河原院研究は、それより数年前に行われた『今昔物語』の仏訳の際に形作られた⁴。ベルナル・フランクの全作品に共通する、文献の厳密な分析と、結集された知識の幅広さに培われた方法論によって、河原院の庭園に向けられた眼差しは、平安時代の風水、「方忌み」、「方違え」といった日本の庭園設計に重要であった概念に関するもう一つの先駆的研究⁵にも通じるものがある。本シンポジウム第1セッションでは、この風水のアジアでの表現と発展が考察された。日本庭園、あるいはさらに広く極東地域における庭園は実際に、西洋人からしばしばアジアの国々の宗教的、哲学的概念を反映するもの、その理解を助けるものとみなされていた。中でも、偉大な中国学者であり民族学者であったロルフ・スタン(1911-1999)は、フランス極東学院の研究者で、弟子のベルナル・フランクに大きな影響を与えた人物であり、極東の庭園に関する研究の後、1987年に『小さき世界 極東の宗教思想における盆栽と住居』(*Le monde en petit - Jardins en miniature et habitations dans la pensée religieuse d'Extrême-orient* - Ed. Flammarion, Paris, 1987; 2001)と題する優れた著書を出版した⁶。

最近では、日本の古典文学、詩歌の研究者ミシェル・ヴィエイヤール・バロンもまた、自身

の研究の中で平安時代の貴族社会における庭園の役割と意味に関心を寄せている。著名な研究者らが歴史的、比較研究的分析のもとに著した『中国文化圏の庭園芸術 中国・日本・韓国・ヴェトナム』⁷に寄せた論文、「魅惑の愉しみ 平安時代の日本の庭園における祝祭と歌合せ (*Les plaisirs enchantés: célébrations, fêtes et joutes poétiques dans les jardins japonais de l'époque de Heian*)」に続き、ヴィエイヤール・バロン氏は2003年、林屋辰三郎校注の『作庭記』をもとに、その新しい仏語訳と非常に明解な分析を発表した⁸。『作庭記』は周知の通り日本最古の庭園書である。この分野での貴重な参考文献となったヴィエイヤール・バロン氏による本書は、2001年に武井次郎氏の協力を得てアメリカの研究者であり造園家でもあるマーク・ピーター・キーンが英語訳を出版した。キーン氏は、西洋に日本の庭園芸術の歴史と技を広めた数多くの本を著しており、最近では2009年に *The Japanese Tea Garden* という本を出版している。

ベルティエ、スタン、フランク、ヴィエイヤール・バロン各氏は、文学、芸術、あるいは日本の古典時代の思想といったそれぞれの研究の枠組みの中で日本の庭園を論じているのに対し、本セッション共同主催者であり発表者でもあったニコラ・フィエヴェ氏は、近代以前の日本の建築と庭園そのものを、一つの研究分野として中心に据えて取り組もうとしたフランスで最初の研究者である。建築家と日本学者という二つのキャリアを持つフィエヴェ氏は、この分野で数多くの著書⁹を発表し、博識に裏付けられた先駆的研究を続けている。

やはり日本学者と建築家という二つの肩書きをもつドイツ人研究者、ギュンター・ニチュケ氏もまた、ヨーロッパで数少ない日本建築、庭園の専門家の一人で、20年以上に渡りプリンストン大学で日本の建築史、庭園史の教鞭をとった人物である。日本の都市計画について、日本人研究者らと連携をとりながら研究し、著書 *Floating*

Bridges of Dreams は21世紀の新しい京都像を描き、1998年に都市計画の国際コンクールで最優秀賞を受賞している。シュトゥットガルトで開かれた「Japanese Gardens 2000」のコミッショナーも務めたニチュケ氏はまた多くのエッセーや論評も執筆しており、中でも1991年に出版された『日本の庭園 直角と自然の形 (*Rechter Winkel und natürliche Form*)』は、複数の言語に訳され、10年ほど前からこの分野の書物としては世界で最も読まれている1冊である。

* 近・現代の建築・庭園空間：考察範囲の拡がり とダイナミズム

前近代の日本の建築や庭園に関する研究の延長として、あるいはそれと平行して、近年では近・現代の日本建築の歴史、哲学、美学に関する研究が発展している。最初に述べたように、昨今の環境問題や建築、都市景観の保護の問題とリンクした、西洋における現代日本人建築家の存在感、ダイナミズム、そして成功は、アジアや欧米で益々多くの人にとって、このテーマに関する研究プロジェクトや出版物の質を高める活力となっている。

日本の建築・庭園空間の進化と受容の複雑さ、そして現在も進行中の変化を把握し、それぞれのクリエイター固有の経歴や芸術性を浮き彫りにするために、こうした問題は国境や学問領域の垣根を越えて検討されている。そしてこうした傾向は、作品としての建築・風景を、西洋と東洋の交流や相互への影響という網目の中で考察する傾向にある研究にも、また交流や共同研究・比較研究を促す研究計画自体にも見受けられる。

また、近年の西洋における日本の近・現代建築に関する解釈の確かさは、研究者自身の多くが建築や美術史、美学史に関する専門的知識をもっていることに加え、最近まで欧米においてなおざりにされ、あるいは知られてさえいなかった豊かな文献や図像のコーパス分析を、日本人研究者らの協力を得て行うことのできる日本学者であるとい

う事実によるものなのである。ジョナサン・レイノルズ¹⁰、ケヴィン・ニュート¹¹、そして本セッション発表者でもあったケン・オオシマ氏といった、このテーマに関して現在最も著名な英語圏の研究者らがその例として挙げられる。建築史、建築理論の専門家であり、コロンビア大学博士、またセインズベリー日本芸術研究所の客員教授でもあるケン・オオシマ氏は、数々の著書や、日本や欧米で関わってきた展覧会が示す通り、日本建築と建築家各々の経歴を、国際的な動向や受容という特殊な背景の中で捉え直そうと努めてきた。1989年にコロンビア大学内に設立された、The Columbia Headquarters for Japanese Architectural Studies and Advanced Researchなど、アメリカの権威あるいくつかの研究機関が、この分野の新しい研究の流れの中継地、交差点となっている。

ブノワ・ジャケ氏もまた、建築家、日本学者という二つのキャリア、二つの視点を持ち、とりわけ日本の近代建築の起源について研究を行っている。ブルーノ・タウトと桂離宮に関する研究発表でも見られたように、ジャケ氏は日本の文献を厳密に分析しながら、20世紀初頭の日本と西洋の眼差しの交錯を解き明かしている。氏が現在京都支部長を務めるフランス国立極東学院は、日本に関する研究で100年以上の歴史をもち、今日では国際シンポジウムを通して、多領域にまたがる比較研究的な視点から、日本の居住様式の問題や空間性を研究する拠点ともなっている¹²。10年以上に渡りヨーロッパ建築史と建築理論、そして日本とヨーロッパの風景概念について研究を続ける田路貴浩氏など、多くの日本人専門家が参加するこうしたシンポジウムは、文化による方法論の違いを追求しながら、真の知の交流をもたらしている。

こうした研究を特徴付けるアプローチの中でも特に、日本学者オーギュスタン・ベルクの役割には言及しなければならない。ベルク氏は、フランスにおいて20年以上前から、複数の研究分野にま

たがって、風景の文学的あるいは芸術的表現や庭園、建築空間に現れるような「風景の文化 (culture paysagère)」の定義、存在条件についての斬新な考察を発展させてきた¹³。これらの問題を、人間界の研究を交えたより広い問題提起の中に捉えなおすことで、こうした思潮は多くの研究者や学生の関心を集め、数々の活動や出版物、そして重要な研究・教育拠点の発展へとつながってきた¹⁴。

ところで、こうした日本特有の伝統建築や風景の特質を認知する傾向は、この20年ほどで次第に大きくなってきたが、この傾向の中に、パリの主要な美術館に現在保存されている二つの日本建築の存在が浮かび上がる。一つは、2001年にギメ美術館の庭に設置された本物の茶室で、そこで定期的に行われるお茶会は大きな評判を得ている。そしてもう一つは、現在一時的に人類博物館に保存されている「木曾の古民家」である。これは完全な状態で保存されている伝統的な木造建築で、長野の最後の麻織物伝承者が所有していたものを、1999年に民俗学者ジャーヌ・コピー氏の指揮で木曾からパリへ移築したものである。確かに全く違うこれら二つの例は、文化・芸術の普及のための威信ある公共施設である美術館という場に保存されているという共通点をもつ。また西洋の目から見れば、これらの素材、意味合い、自然や周囲の環境との関係性という点で、日本の文化や生活様式、空間性を非常によく反映したシンボルなのである。

以上述べたような、様々な研究の創始者らが切り開いているテーマや、研究対象の広がりについて、このシンポジウム議事録の中で研究発表者らによってその概観が示されることを期待しつつ、最後に本セッションの主なテーマと、今回特に取り上げたいと考えたアプローチについて手短かに述べたい。

Ⅲ 本セッションの方向性：テーマ、対象年代、方法論

日本の建築や庭園は、海外の日本学者、あるいは日本文化の愛好家の間において、今見てきたように数世紀前から今も変わらず流行や特別な関心の的であったが、その受容の理由、受容形態の多様さや豊かさ、その普及、またそれがきっかけで日本や西洋で起こった国際交流や文化の伝達については、まだ大部分が未研究である。18世紀のヨーロッパ貴族の調度品を飾った異国情緒あふれる「日本趣味」であれ、19世紀末から書物、絵画、工芸品、あるいは万国博覧会の日本館といったものに見られたジャポニズムであれ、20世紀前半以降の近代性の表現への憧れ、あるいは手段、さらには前衛運動の要求としてであれ、日本の建築や自然空間は、欧米において、多様で複雑な解釈と同化の場であった。一方で、こうした建築や風景の遺産に向けられた西洋の眼差し、建物の機能や素材の刷新、そして建築家同士の国際レベルでの交流の増進は、20世紀末の日本に、建築空間・風景の革新的理論と実践をもたらした。建築史学の厳密な枠組みを超え、日本学という視点でこうした問題を問うことで、まさに海外における日本文化の伝達と同化の背景、要素を国際的・学際的に研究することを目的のひとつとする、お茶の水女子大学比較日本学教育研究センターが毎年開催するこの国際日本学シンポジウムは、日本の建築・庭園の受容と普及を複雑化してきた、文化間の競合や流動の仕組みを解き明かす役目を果たすことができるのではないかと私たちは考えた。これまでの国際シンポジウムでは、フランスやイギリスにおける最初の日本美術コレクションの歴史、日本や欧米における源氏物語の旅、そして明治以降の日仏交流におけるテキスタイルの役割といった多様なテーマを扱ってきたが、今回もまた同様に、何よりもまず比較日本学教育研究センターの使命に合う方法論的基準に答えるものである。

こうした展望の下、今回のシンポジウムではテーマとアプローチに次のような方向性をもたせようと考えた。

ー日本の建築・庭園の受容と普及の歴史を明らかにするために、19世紀後半から20世紀前半までの決定的な転換期に着目する。ニコラ・フィエヴェ氏がジョサイア・コンドルをはじめとしていくつかの重要な例を挙げながら示しているように、この時期は、ジャポニズムという背景の中で、日本の伝統建築と庭園技術についての最初の文献が、どのように西洋で紹介されたのか、また、近代性の発見や建築の「前衛」という見地から、このようなダイナミックな交流と国境を越えた理論の解釈の発展が、どのような役割をもったのかを考察させてくれる時期である。

ー理論・形式の両面において、日本建築の受容と普及のプロセスに伴う方法、ねらい、影響を、発表者それぞれが建築、庭園、または建築家の経歴の具体例をひとつ挙げて検証する。

ブノワ・ジャケ氏とヨラ・グロアゲン氏はそれぞれに、桂離宮、あるいはアントニン・レーモンドの軽井沢の「夏の家」に見られる、近代建築の誕生への様々な寄与について検証した。山田守の先駆的功績と評価、ノグチ・イサムによるユネスコ庭園、オランダ建築と堀口捨己の茶室を通して、ケン・オオシマ氏、田路貴浩氏、内山尚子氏が「国際様式」の定義、意味、背景、また文化的アイデンティティや文化的他者性の要求、そして建築・庭園の受容と普及によって起こる移動や融合といった重要な問題を、個人、国家、世界という次元で、写真や文芸という媒体を通して取り上げた。

この異文化間の対話の中で、フランスで「アントニン・レーモンドの建築における西洋の近代運動の導入と応用」と題する博士論文を執筆中のヨ

ラ・グロアゲン氏、そしてイサム・ノグチの国際的な作品にみられる日本との関係性について考察する、西洋美術史専攻の本校大学院生、内山尚子氏の二人の若い研究者の参加もまた、日本の建築空間や風景の受容と刷新に表われる、文化と眼差しの出会いの意味と、そこから生じる反響を明らかにしてくれるものであった。

IV 謝辞

最後に、鹿島美術財団の協賛と「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プログラムの支援を得て、今回初めてフランス国立極東学院と共同で企画された、2010年度比較日本学教育研究センター国際シンポジウムの準備にご協力いただいた全ての組織と全ての方々に、この場を借りて謝意を表したい。

今回のまとめ役の一人であり、絶え間ない援助と貴重なご助言を下さった秋山光文先生、パネルディスカッションの司会を快く引き受けて下さった元岡展久先生、開催式でフランス国立極東学院の歴史についてお話し下さった同学院東京支部代表彌永信美氏、そして今回のシンポジウムを最善のコンディションに整えて下さった比較日本学教育研究センター長の古瀬奈津子先生、星野さんをはじめ、センター全ての方々にも心よりお礼申し上げます。

また、この度ご協賛下さった鹿島美術財団は、国内外において美術や建築に関する様々な事業を助成し、その理念は比較日本学教育研究センターの目的とも大いに一致するものであり、このシンポジウムは同財団の寛大なご理解とご支援なくしてはありえないものであった。心より感謝申し上げます。

そして、今回の共同主催者であり、センターの学術パートナーであるフランス国立極東学院京都支部の現支部長ブノワ・ジャケ氏、並びに客員教授ニコラ・フィエヴェ氏のお二人が日本に滞在中

であるということ、そして両氏の経歴と研究は、今回の計画が生まれる直接のきっかけとなり、幾度も協議が重ねられ、本セッションの方向性とプログラムが決定された。お二人に、心より感謝申し上げます。

注

- 1 François Berthier, *Le jardin du Ryōanji — Lire le zen dans les pierres*, Paris, Adam Biro, 1989, 1997
- 2 François Berthier, Graham Parkes, *Reading Zen in the Rocks The Japanese Dry Landscape Garden*, The University of Chicago Press, USA, 2000
- 3 *Un jardin fameux de l'époque de Heian: le Kawarano-in*, in *Annuaire de l'Ecole Pratique des Hautes Etudes IV section, Sciences Historiques et Sociales*, 1977. 著者の死後に翻訳され、注釈が付けられて、『風流と鬼平安の光と闇』（平凡社1998年）の中に「源融と河原院」というタイトルで刊行された。
- 4 *Histoires qui sont maintenant du passé (Konjaku-monogatari shū) - introduction, traduction et commentaires*, Paris, Gallimard, 1968; édition révisée, 1987 (27章ですでに「河原院」と「鬼」が問題となっている。)
- 5 *Kata-imi et Kata-tagae, Etude sur les interdits de direction à l'époque Heian* PUF, Paris, 1958 日本語訳の改訂版『方忌みと方違え 平安時代の方角禁忌に関する研究』が1989年に岩波書店より刊行されている。
- 6 日本ではロルフ・スタン著『盆栽の宇宙誌』（福井文雅 / 明神有洋訳）が1985年にせりか書房より出版されている。福井文雅 / 明神有洋訳
- 7 *L'art des jardins dans les pays sinisés (Chine, Japon, Corée, Vietnam)*, Extrême-Orient, Extrême-Occident, Presses Universitaires de Vincennes, 2000
- 8 *De la création des jardins, Traduction du Sakuteiki 作庭記*, Maison franco japonaise, 2003
- 9 多くの著書の中で、次のものが挙げられる：*L'architecture et la ville du Japon ancien. Espace architectural de la ville de Kyōto et des résidences shōgunales aux XIV^e et XV^e siècles*（古代の日本の都市と建築 京都の建築空間と14、15世紀の武家屋敷），Bibliothèque de l'Institut des Hautes Études Japonaises, Collège de France, Paris, Maisonneuve & Larose, 1996; *l'Atlas historique de Kyōto. Analyse spatiale des systèmes de mémoire d'une ville, de son architecture et de ses paysages urbains*（京都歴史文化地図），Paris, Centre du Patrimoine Mondial, Editions de

l'UNESCO – Editions de l'Amateur, 2008（フィエヴェ氏監修の共著本である本書は、未公開のものも含めた豊かな図像や資料を基にした分析作業で、ヨーロッパや日本で広く評判になった）。

- 10 "Ise Shrine and a Modernist Construction of Japanese Tradition." *Art Bulletin* 63:2, 2001 / *Maekawa Kunio and the Emergence of Japanese Modernist Architecture*, University of California Press, 2001
- 11 *Frank Lloyd Wright and Japan: The Role of Traditional Japanese Art and Architecture in the Work of Frank Lloyd Wright, 2000 / Place, Time and Being in Japanese Architecture*, Routledge, New Edition, 2004
- 12 EFEOやその研究員が、フランス文化省日仏交流ネットワーク（JAPARCHI）や、京都市芸繊維大学特色GPプログラム「科学と芸術」、日本学術振興会-フランス国立科学研究センター二国間交流事業（共同研究）などの、日仏の学術パートナーと共に関わるシンポジウムやセミナーには、次のようなものがある。
- *Tisser la culture, construire la culture*, 大橋良介の主宰によるパリ・ラ・ヴィレット国立高等建築学校での日仏シンポジウム『文化を紡ぐ』（2003年）, (Kyoto, Tokyo, 2003)
- *Savants et bâtisseurs / 伝える人建てる人 文化財と建築* (Kyoto, 2006.04.23 ~ 04.2)
- *Dispositifs et Notions, Croisements des spatialités et temporalités françaises et Japonaises/ 仕掛けと概念：空間と時間の日仏比較建築論*（西田雅嗣ほか主宰）(Kyoto, Nov, 2009)
- 13 Augustin Berque, *Le sauvage et l'artifice; les Japonais devant la nature*, Gallimard 1986（『風土の日本 自然と文化の通態』筑摩書房、1988）
- 14 特にフランスでは、1994年に社会科学高等研究所のベルク氏の研究セミナーと共同でパリ・ラヴィレット建築学校に設置された特別教育課程「建築・風土」が挙げられる。この教育課程から、ベルク氏の監修で『都市の質 *la qualité de la ville*』（1987）や『都市の制御 *la maîtrise de la ville*』をはじめとする書籍が出版された。最近の活動としては、『堪え難い都市 *La ville insoutenable*』（オギュスタン・ベルク、フィリップ・ボナン他、2006年）の出版、2000年に京都大学と合同で行われた日仏シンポジウム『建築と都市への交差する眼差し *Regards sur l'architecture de la ville*』（ミュリエル・ラディク、コリース・ティリー主宰）がある。